

平成26年度「不登校に関する研修会」 講義記録

第5回：平成26年11月26日（水） 姫路市市民会館

テーマ「不登校のリスクを減らす予防的支援」

講師：和久田 学 先生（大阪大学大学院特任講師）

不登校支援のシステムデザイン

1 現状分析

文部科学省の調査では、2003年から2013年にかけて不登校の出現率としては増加している。不登校のきっかけとしては、小学校では「不安など情緒的要因」(35.3%)を始めとして、「無気力」「親子関係を巡る問題」と続いている。中学校においては「無気力」(26.2%)に「不安など情緒的要因」「いじめを除く友人関係」が続く。また、再登校へ向けた効果的な取組としては小学校・中学校ともに「家庭に電話、迎えに行く」「家庭訪問で指導・援助」が上位にきている。

不登校対応の問題として、問題が起こってから対応したり、教員によってやっていることが違ったり、継続した支援が困難であったりする上に、予防的支援が必要とされながら具体的に何をすればいいのか曖昧であることがあげられる。

2 問題への対処法：概論

例えば、病気へのアプローチを例に取ってみると、A.予防⇒B.早期発見早期治療⇒C.治療の三段階で考えられる。

A.予防…危険因子を減らし、保護因子を増やせば全体的に予防効果が上がる。

B.早期発見早期治療…健診項目をチェックして、正常域を外れたら精密検査。

どの病院でも同じ精度の健診が受けられ、チェック項目、方法には根拠がありマニュアル化されている。そして治療の可能性が高い。

C.治療…症状が顕著になってからの治療なので、苦しいし治療に時間がかかる。

不登校への対応もこの三段階、A.予防支援⇒B.早期発見早期支援⇒C.介入支援で対応でシステム化していく必要がある。

3 生徒指導上の問題への対処法

集団を三つに区分することができる。徹底的な介入が必要な群(1～2%)、早期支援をする群(13～14%)、予防的支援をする群(85%程度)。この最後の多数派を守る（褒めて育てる）ことにより集団の雰囲気よくなる。その結果として、問題行動が減る。具体的にはルール設定を含んだ『学校風土』の改善が重要である。『学校風土』すなわち、集

団の雰囲気は全ての子どもの行動に影響を与え、学力向上やいじめ予防とも相関関係がある。

4 不登校支援システムの構築

A. 予防支援（知識の提供）

学校風土の改善は、不登校だけでなくいじめ、非行の予防や学力の向上にもつながる。また、学校風土を科学的に計測することで、弱みに支援を入れ、強みを活かすことができる。

B. 早期発見早期支援（早期発見システム⇒支援）

危険因子、保護因子がわかることでできることがある。例えば、危険因子が複数ある子どもは、予防的関わりが特に大切になる。予防にしても早期支援にしても、危険因子のうち変えられるものにアプローチをし、保護因子は全て強めるか増やす。

また、システム化するには、欠席初日【登校すべき日なのに登校していないことを連絡、保護者に担任が問題解決の手助けを提案する】⇒欠席3日目【不登校の心配を知らせる手紙、職員による家庭訪問、管理職への報告】などを具体的にやるべきことを考えておく。

C. 介入支援（不登校になってからの支援）

この介入支援は、個別性が高い。ここでは、不登校を含む、全ての問題には個人要因（遺伝的要因、先天性、突発性）と環境要因（過去の環境、現在の環境）の両者が関係していることのみ触れておく。

不登校に限らず、これまで点在化していた取組を、包括しシステム化していく必要がある。システム化には、プログラムと共に道具（教材、書類の形式）、トレーニング（研修）が必要。そして、継続していくために評価の仕組み（調査・研究・解析）が必要になる。

また、システムにする時に必ず予防の観点を入れると、効果が上がりやすく教員のストレスも減る方向に働く。